
世界の創造主が魔法学園の生徒に！

銀河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の創造主が魔法学園の生徒に！

【Nコード】

N9756W

【作者名】

銀河

【あらすじ】

小説を書くのが趣味である神器銀夜はまだ設定しか書いていない自分の小説の世界に入り込んでしまった！のんびりとした学園生活を送りたいが体質的に問題に巻き込まれてしまう！そんな銀夜が送る波乱万丈な学園生活が始まる！

第1話 設定（前書き）

短いけど更新頻度を高い。それを目指してがんばります。よろしく
お願いします。

第1話 設定

俺の趣味は小説を書くこと。新しい小説を書き始めることにした。

<設定>

この世界はアテネという神が創った内の1つ。

通常異世界同士は干渉できない。

神に認められた者だけが異世界を移動することが出来る。

主人公はそうして移動して来た者である。

スタート地点はどこかの森の中。

魔物相手に独学である程度戦い方をマスターする。

森の中を通る奴隷商人が盗賊に襲われていたので助ける。

奴隷商人も悪いやつで奴隷を違法に捌いていたので、倒して奴隷達を助ける。

その後、森を出て常識を身に付けるために、魔法学園に入る。

そこで経験を積む。

魔法を使うには魔力と呪文と想像力が必要である。

魔力は込める量が少なすぎると発動せず、多すぎると暴発する。

呪文というのはこれから魔法を使うというイメージを持ちやすくするためなので適当で構わない。

ただし、中級以上の魔法は長い呪文を唱えないと威力が激減する。

想像力は例えば火の魔法だったら球状をや放射状をイメージしたりする。

想像力が強いほどイメージは固まり、威力が上がる。

魔法には属性があり、火、水、風、土、雷あり属性ごとの優劣がある。

それらを融合して新たな属性を生み出すことも出来る

例外的に光、闇、時空、空間、召喚がある。

それらは不干渉である。

世界中に住む精霊の力を借りる精霊魔法というものや、魔方阵を使うものもある。

武器を使った戦闘は魔力を込めて戦う。

魔導具という魔力を込めた装備が主流である。

魔力のこもっていない武器は非常に弱い。

魔法と魔導具で魔物と戦うファンタジーな世界である。

冒険者という存在がある。

彼らは依頼を受け、魔物を討伐したり、指定のアイテムを取ってきたりする。

魔法学園卒業後の進路としてもっとも有名である。

授業で依頼を受けることもある。

主人公はこの世界ではめずらしい銀髪に白い眼である。

目や髪は本人の中で一番強い、属性を現す。

主人公は全属性が均等に強いのでそうってしまった。

基本的にありえない。

主人公は本来の力を隠してのほほんと生きていきたい。

しかし、主人公は目の前で困っている人が居たらほっとけないので問題に巻き込まれてしまう。

その他の設定は物語の中で小出しにしていく。

「はーやつと終わった。」

ようやくある程度の小説の下地が完成した。もう既に朝日が登ってきている。俺は睡魔に襲われ、そのまま眠りについた。

そして朝、起きると――――

俺は1人で暗い森の中に居た。

第2話 魔物と魔法

なんてこった。

俺、中学3年生、神器銀夜^{じんぎんや}は自分で作った小説の世界に入り込んでしまったようだ。

何故わかるかって？

それは、俺が考えた通りの世界だからさ。
10分ほど時は遡る。

「はっ？」

俺は目覚めると日の光がほとんど届かないような森の中にいた。

確か、俺は新作小説の設定を書いて寝たはずだ。

どうしてこんな事に？

とりあえず、俺は立ち上がって辺りを見渡してみる。そこは、前人未到と言っているほどの原生林だった。

突然、背後から唸り声が出た。

振り返るとそこには1匹の黒い狼がいた。

「へ？」

狼は丸腰の俺に躊躇なく襲いかかってきた。

「えええ！？」

俺は一応陸上部なので身体能力は高い方である。

辛うじて狼の凶刃を避ける。しかし、狼はすぐに体を翻し、襲ってくる。

このままでは埒が明かない。

俺は薄々感づいていたので一か八かやってみる。イメージするの

は燃やし尽くす火球。

「火よ、球状に留まれ、飛んでいけくファイヤーボール>！」

一か八か唱えた魔法は成功し、50cmぐらいの紅蓮の火の球が目の前に出現した。すると、火の球は狼に飛んでいって、その体を焼いた。

狼は燃え盛る体の火をどうにか消そうと地面に擦り付けるが、いずれ、動かなくなった。

「なんてこった!？」

俺は自作小説の世界に来てしまったようなのである。

とりあえず現実を受け止めよう。俺は異世界に来てしまった。

「こんな事になるんだったらもつとちゃんと設定書いとければよかったな。」

後悔後先立たず。とりあえず、生きるすべを見につけよう。

黒い狼はファイヤーボールで美味しそうに焼けていた。

とりあえず、口に含んでみた。

「うめええええ！」

どうやらこの世界では魔物は食べられるみたいである。

辺りを散策してみたが同じような世界が広がっていた。途中、2回も狼に襲われた。ファイヤーボールで一撃だったけど。

どうやら魔物を食べると魔力的なものが増えるみたいだ。なんか感覚的に分かる。

魔法を使うとき、何かが己の体から抜けていき、魔物を食べると入ってくる。

そういう世界か。自分で創った世界のことがだんだん分かっていくのは楽しいな。

続いて魔法について検証してみた。

呪文の長さで威力が変わるかの実験。木に当てて比べてみた。

結果、『火よ、球状に留まれ、飛んでいけ<ファイヤーボール>！』の方が『火よ！飛んでいけ！<ファイヤーボール>！』より強いことが判明。呪文が長いほど強くなるようだ。

次にありったけ魔力を込めてみた。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ<ファイヤーボール>！」
・・・。

3mほどの巨大な火球が現れた。しかし、俺はそれをコントロール出来るほどの魔力は残っておらず、それはその場で掻き消えた。

そして俺はその場でぶっ倒れた。

魔力切れだろう。気持ち悪い。平衡感覚がない。これやばい。こんな時に魔物がやってきたら絶対死ぬ。

俺は無理矢理体を引きずって手ごろな木の上に登り、そのまま眠り込んだ。

第3話 5つの属性と融合

目覚めると魔力は全快していた。どうやら魔力は睡眠によって回復するようである。

魔法の実験は魔力に気を使わなければ・・・

次の実験は火以外の魔法。狼との戦闘で試しに使ってみた。

「水よ、飛んでけ、＜ウォーターボール＞！」

物理的なダメージは低いが相手を押し流す。

「風よ、飛んでけ、＜ウィンドボール＞！」

見えないという利点があり、押すことも切り裂くことも出来る。

「土よ、飛んでけ、＜サンドボール＞！」

硬さでのダメージを与える。

「雷よ、飛んでけ、＜サンダーボール＞！」

5つの中でもっとも速く、威力もそこそこ高い。

結果、俺は5つの属性全てに適性があることが判明。また、魔物には弱点があることが判明。

狼に風をぶつけても効果が薄いのに対し、火は一撃で葬り去ることが出来るからである。

光、闇、空間、時空はよく分からず出来なかった。

次に魔法の融合の実験。これは大成功だった。

火と水で見えない熱い気体＜水蒸気＞、火と風でより強力なく炎＜、火と土で敵に張り付き燃やし続ける＜溶岩＞、火と雷で熱を持った雷＜電熱＞、水と風で冷やされた水＜氷＞、水と土で癒しの＜草＞、水と雷で強力なくスパーク＞、風と土で目隠しにもなりダメージも与える＜砂塵＞、風と雷で天候を乱す＜嵐＞、土と雷で込めた魔力分だけ動く人形＜ゴーレム＞になった。ただし、融合魔法は魔力を滅茶苦茶持っていかれる。

狼を魔法で倒しては食って、魔法の修行兼研究を繰り返していた。

1週間ほど経過して俺はなぜかここには狼しかいないことに気づいた。いい加減飽きてきたし栄養バランスが心配だ。ということで俺は原生林の森の中を放浪することにした。

狼の毛皮を爪で切り裂いて簡単な服を作った。それを旅の服とすることにした。

原生林の森はそれほど広くはなかった。1日歩くと原生林の森からは抜けられた。そこには未知の魔物がたくさんいた。蠍のような尻尾を持った毒蜘蛛、魔法を5発ほど打ち込まないと倒れないめっちゃ強い青い虎、尻尾で枝やツタを掴んで攻撃してくる猿、魔法が効かない魔物（硬い木の棒で倒した）等、様々な魔物がいた。

今思えばあそこは狼の縄張りだったから他の魔物がいなかったんじゃないか？

俺はそこで魔法も剣（魔力の込めた木の棒）も使ったよりハードな修行を開始した。

第4話 出発

修行を始めて1ヶ月――――

俺は森の頂点に立った。

魔力はもう融合魔法でもまず魔力不足に陥ることは無いほどに増えた。

元々高かった身体能力は命のやり取りを繰り返すことにより、格段と上がった。

小説の通りなら俺は盗賊と奴隷商人に出会うはずだ。しかし、この森には人は立ち入らない。仕方がないから森を出よう。

俺はしばらく大型の魔物を倒し、素材を集めた。資金集めである。おそらく、街に行けば売れるだろう。

そういうことで俺は狼の毛皮の服に、一番でっかい虎の牙を短剣代わりに装備し、毒蜘蛛の糸で編んだ袋に素材を大量に詰め込んだ。

そして、俺は1ヶ月間暮らした森を出た。色々あったが名残惜しいものである。

馬車の中で2人の少女はすすり泣いていた。

私は獣人種、人間ではないからみんなに差別されてきた。しかしそれももう終わりになるかもしれない。

今期のエルシオン魔法学校に入学できればエルシオンの市民権がもらえる。

そうすればみんなも受け入れてくれる、そう思っていた。

しかし、エルシオンの隣町、ルクセリアまで来てから奴隷商人に捕まってしまった。

私はどうなるのだろうか？

私は両目で目の色が違うオッドアイ。

かつて、世界を脅かした魔女もオッドアイだったということから差別されてきた。

両親までもが私を差別し、生活が苦しくなったので私は売られた。私は何のために生まれてきたのであろう？

だれか教えて？

俺は森を出て適当に歩いていた。すると、あきらかに人為的な道を発見した。

「お、馬車も通るみたいだな。」

道にはくっきりと車輪の跡がついていた。しかも真新しい。

俺は全速力で馬車を目指して追いかけた。

1時間ほど走ると前方に馬車が見えてきた。しかし、今の所襲われる気配は無いので傍観していた。

しばらくすると、馬車の前方から別の馬車がやってきた。御者の男は商人のようだが、顔中に傷があった。商人に扮した盗賊か？

その予想は見事に的中し、馬車が擦れ違う瞬間ナイフを持った男達が馬車の中から現れ、襲い掛かった。

俺は全速力で走った。

商人側にも護衛らしき男は居たが、奇襲で真っ先に殺されてしまった。

盗賊側はもう勝った同然で、商人側をいたぶっていた。

俺はそこに魔法を放つ。

「火よ、風よ、燃え盛り、飛んでいけ、＜炎弾＞！」

火と風を融合した炎を盗賊の馬車にぶち当てた。馬車は勢いよく燃え上がった。進路上にいた連中は骨まで溶けて消えた。

「貴様何者だああ！」

盗賊の頭的なヤツが怒り狂う。

「答えるかよバカ野郎。風よ、切り裂け＜ウィンドカッター＞！」

俺はサーベルを振るってきた頭を風魔法であっさり微塵切りにした。

「頭！」

盗賊の1人が叫ぶ。

「まだやるなら相手するけど死にたくないなら今すぐ引いてくんない？」

俺が問いかけると盗賊はしぶしぶと引いていった。

すると、商人らしき男が駆け寄ってくる。

「危ない所を助けていただいてありがとうございます。よかったら街まで同行してもらえませんか？」

俺はそれをガン無視して馬車の中を見る。そこには俺と同じくら

いの美少女が2人いた。怯えた目をしている。2人ともガリガリに痩せていて、首輪までされていた。

「あんた奴隷商人？」

男に聞く。

「ええ、うちは質の高い奴隷のみを扱うクリケット商会という者です。もしかして汚い奴隷と一緒に嫌でしたか？」

少女達を見下して言った。

「黙れくずが！」

俺は有無を言わず、虎の牙で男の首を薙いだ。

第5話 ミュウとレイ

人を殺すのに全く抵抗が無い自分が恐ろしい。
魔物との1ヶ月間の死闘のおかげで精神力は強化されているよう
だ。

奴隷商人の体はその場で崩れ落ちた。

ここに居るのは俺と少女だけ。

俺はとりあえず怯える少女達を馬車から引きずり出した。

「俺は神器銀夜。銀夜が名前だ。よろしく。」

「わ、私はミュウ・ライトです。助けてもらってありがとうございます
ました。」

金髪猫耳の少女はミュウと名乗る。

「私はレイ・ハン。助けてくれたことにはありがとう。」

左眼が蒼、右目が緑の蒼髪の少女はレイと名乗る。

「どういたしまして。ところでミュウとレイはなんで奴隷になった
の？」

「「・・・」」

「あれ？」

なんかまずかったか？

「私が獣人族だからに決まっているでしょう！」

「私はオッドアイだから。」

2人は声を荒げて言う。

「あーごめん。俺はあんまり常識とか無いんだわ。」

「獣人族は人とは違います！だから差別され忌み嫌われる存在です
！」

「オッドアイは禁忌。存在してはならない。」

「なんで？」

「「はっ？」」

2人の声が重なる。

「2人ともそんなかわいい顔してんのに自分を忌み嫌われるとか存在してはならないとか言うなよ。俺なんか銀髪だぜ？」

「か、かわいい!？」

「ななな!？」

2人とも狼狽している。

「ああ、2人とも整った容姿だし、ミュウはかわいい猫耳がチャームポイントだし、レイは綺麗な眼を持ってるじゃん。悪いところなんて1つもないだろ？」

「そ、そんなこと初めて言われました・・・私は自分の耳が大嫌いだったのに・・・」

「俺はすごくかわいいと思うぞ? そう思わないやつは眼が腐ってんだろ。」

「ううう、ありがとうございます・・・」

ミュウが照れながら言ってくる。

それに対してレイは未だに敵視してきている。

「嘘つき・・・」

レイは心底恨んだ眼で見てくる。

「嘘じゃないよ。」

「そんなわけ無い! 私はオッドアイを持って生まれた時点で居場所なんて存在しない。差別され続けてきてついに親にも売られた! 全ての原因の私の眼を綺麗なんて言えるわけない!」

レイは泣きながら叫ぶ。

「・・・そ、そんなことがあったのか・・・じゃあ俺が居場所になつてあげるよ?」

「な、なあ!？」

「生憎俺は外見で差別するような男じゃないよ? レイがよければ俺と一緒に来ないか? ミュウもどうだ? とりあえずエルシオンに行くつもりだが?」

「わ、私はもともとエルシオンに行きたかったのでは是非!」

「・・・なぜあなたはそんなことを言える? 身ず知らずの私に?」

「理由なんか無いよ?」

「はぁ?」

「強いて言うなら俺はレイやミュウと一緒に居たいなって思っただけだから。」

本心からの気持ちである。

「・・・ほんとに?」

「ああ。」

「・・・ほんとのほんとに?」

「ああ。」

「・・・オッドアイの私でも?」

「ああ、どんなレイでも受け入れるよ。」

「どんなことがあっても後悔しない?」

「絶対だ。」

「分かった。今から私はあなたの奴隷。よろしく。」

「ちよまった! 奴隷は辞めてくれ!」

「なにを? 私達は首輪がついた時点で奴隷階級となっている。首輪がある限り私達は誰かの所有物になるしかない。」

「じゃあそれ外そうか?」

「「は?」」

「2人とも動くなよ。風よ、切り裂けくウィンドカッター!」

俺は風魔法で2人の首輪を破壊した。

「え? 私は奴隷じゃなくなっただけですか!?」

ミュウの顔は歓喜に満ちていた。

「そうだよ。」

「ありがと・・・でも首輪が無くても私は永遠にギンヤだけの奴隷。」

レイは嬉しそうに、さも当然かのように言う。

「わ、私もギンヤさんだけの奴隷がいいです!」

ミユウもなんか言ってきた。

「なんでやねん！」

俺の渾身の突っ込みは女性2人には通じなかった・・・

第6話 銀髪と猫耳と魔女？

「・・・レイ、ミュウ。」

「なんですか？ギンヤ様？」

「何？ギンヤ？」

レイが様付けになってるのは無視しておこう。

「いい加減離してくれない？」

俺は2人に腕をがっちりホールドされている。

「離しません！」

「離さない！」

「・・・両手を塞がれているとなにもできないんだよ。周りの視線が痛いし！」

「することないからいいじゃないですか。」

「いやなの？」

「いや、嫌じゃないしいいんだけど・・・」

俺は別の商人の馬車に乗せてもらってエルシオンに向かっている。もともとあった馬車は魔物が襲ってきて大破してしまい、仕方ないので歩いて行こうとしていたら偶然通りがかった商人が現れたので、盗賊に襲われた、俺達は同行人だった、と適当に嘘をつき、同情を誘った結果、魔物素材の中から虎の牙1本を渡すことで乗せてもらったのである。もちろん商人達には引かれている。銀髪、獣人、オッドアイの3拍子だからな。

「はぁ・・・」

美少女2人と居られるのはこの上ない幸せのはずなんだが、この

2人は疲れんな・・・

「そういえば、2人は魔法は使える？」

動けなくてあまりにも暇なので質問してみる。

「私は雷の魔法を主に使います。雷で肉体を活性化させての近接戦闘も得意です。」

「雷の魔法にそんな使い方あったんだ。」

「私は水と風。2つを融合させる氷も一応使える。でも魔力的に実践向きじゃない。」

「融合魔法は魔力を大量に消費するからね。仕方がないよ。」

「ところでギンヤ様は？」

「ギンヤは？」

「俺は5つの属性とその融合魔法をすべて使える。魔力も充分にある。剣術は完全に我流だな。そこいらの魔物には負ける気がしないけど。」

「「え・・・え？」」

2人は呆然とした表情で俺を見る。

「何？俺が怖くなったの？」

「い、いえそんなことはありません。ただ、びっくりして・・・」

「私も驚いた。銀髪は5つの属性を現しているということ？」

「ああ。たぶん。」

「ちなみにだけど師はいるの？」

「いや、俺は1ヶ月ほどそこら辺の森で修行してたんだ。それより前は何していたかわかんない。」

「1ヶ月もですか？ここら辺一帯は＜弱肉強食の森＞といって、普通みんな入ったら帰ってこれないんですよ！」

「私は大きな魔物の牙に気づいていたからかなりの実力者だとは気づいていたけど・・・」

「ああこれ？これは一番大きな虎の牙を短剣代わりにしてるんだ。」
「もしかしてこれ＜蒼天虎＞の牙じゃないですか？」

「名前はわかんないけど青いめっちゃ強い虎だったよ。他にも見る？」

俺は素材袋を見せた。

「＜蒼天虎＞の牙、毛皮、＜黒狼＞の爪、毛皮、＜尾猿＞の皮etc・・・ってどんだけですか！？袋も＜蠍蜘蛛＞の絹糸じゃないですか！？」

「すごい・・・」

「そうなのか？」

「全部売れば金貨50枚ぐらいいくんじゃないですか？」

「たぶんそれくらい・・・」

「えっと・・・言っただけど俺は1ヶ月前以上前のことはよく分らないんだよ。貨幣の単位とかも。」

「えええ？」

「記憶喪失？」

「みたいなものかな？」

そう言っておくのが懸命だろう。

「それでギンヤ様はこれからどうするのですか？」

「俺は魔法学校に入学したいなと思っているんだけど？」

「わ、私もです。入学試験を受けようと思って遥々来たんですが、途中で捕まっちゃったんです。」

「こんな私でもいつか入学できたらと考えたこともある。是非ギンヤと学園に行きたい。それに私はギンヤだけの奴隷。どこにでもついて行く、一生。」

最後の方は聞こえなかったことにしよう。

「入学試験があるの？」

「はい、でも下級魔法が使えるか、試験官と模擬戦をして、認められるかのどちらかなので簡単ですよ。」

「特待生枠というものもある。中級魔法が使えるか、試験官に勝て

れば入れる。生活費を除く、授業料とかが無料になる。」

「2人は中級魔法は使える？」

「もちろんです！肉体活性化は中級魔法です。」

「魔力はほとんど尽きるけど氷の中級魔法は使える。」

「じゃあ特待生枠を狙う？」

「はい！」

「うん。」

「じゃあエルシオンに着くまで色々教えてくれない？通貨とか歴史とか。」

「はい！」

「うん。」

俺達の道中は常時にぎやかな声が絶えなかった。

第7話 冒険者ギルド

「ふあああ！」

「綺麗・・・」

「凄いね。」

俺達はエルシオンに着いた。エルシオンは町並みが綺麗に揃っており、外観もよい。なにより人が多かった。

「何処に行けばいいのかな？」

「えと・・・まず素材を売ませんか？それで服をもうちよつとよいものに・・・」

「あっそうだね。」

俺は狼の毛皮の服、2人は奴隷の質素な服である。さすがに容姿以外も目立ちすぎる。

「素材は冒険者ギルドで買い取ってもらえますからまずそこに行きませんか？」

俺はミュウの提案に頷く。ギルドにも興味あるし。

冒険者ギルドは酒場みたいだった。否、酒場だった。依頼の成功を祝ってか、昼間なのにテーブルで飲んだくれている人がたくさんいる。

俺達は受付に歩み寄る。

「はあい。なにか御用ですか？」

声をかける前に受付嬢が話しかけてきた。

「素材を買い取って貰えますか？」

「ええ、当ギルドでは素材の買い取りも行っています。ただ、ギルドに登録しなければなりません。」

「えっと・・・登録ってどのくらいで出来るんですか？」

「10分程度となります。」

「じゃあお願いします。2人も登録しておく？」

「はい、いずれ学園で授業の一環として登録することになりますから登録しておいて損は無いですね。」

「もし、落ちたときは冒険者になるしかないから・・・」

「そういうこと言うなよ！」

「はい、ではご説明します。ギルドに登録したものは基本的に自由です。あちらにある依頼ボードに貼ってある依頼を見て、自分の強さに見合ったものを選んで持ってきてください。そしたらここでサインをして、依頼を受けることができます。また、冒険者同士のいざござにはギルドは関与しません。それではこれに血を垂らしてください。」

差し出されたのは灰色のプレート。

「これは簡単な魔導具です。血を垂らしますとギルドに登録されたことになり、名前、年齢、人種、身分、ギルドのランク、パーティの有無、パーティのランク、称号が表示されます。また、身分を証明するものもあります。やってみてください。」

俺は親指を噛んで傷を作ったり、血を垂らした。すると、プレートは光輝き、銀色に変わった。同様に、ミュウは黄色、レイは青に変わった。

名前..神器銀夜

年齢..15歳

人種..人間

身分..流れ者

GR..F

P T；無し

P R..無し

称号..アテネ神に認められた男

装備..蒼天虎の大牙、黒狼の服

と、表示された。

・・・称号がまずいな。

「プレートは使用者に合わせて色を変えるんです。これで、登録は終了です。続いて買い取りに移させていただきます。品物をお願いします。」

「はい。」

俺は素材袋をカウンターの上に置いた。

「ずいぶんありますねえ・・・てこれ全部＜弱肉強食の森＞の魔物じゃないですか!？」

「そうですね。」

「そうですねって・・・分かりました。鑑定に時間がかかりますので3時間ほどお待ちください。」

「だ、そうだ。その間に学園に行ってみる？」

「そうですね。3時間あれば試験を受けて帰ってこれるでしょう。」

「試験ってそんな簡単なのか？」

「説明した通り、魔法を見せるだけ。」

「じゃあ善は急げだ。行こうか。」

俺は2人の手を握り、学園に向かった。

第8話 入学試験

俺達はエルシオン学園入学試験を受けに来ていた。

元の世界と違い、試験期間1週間の内に何回でもチャレンジできるそう。ただし、再チャレンジは金を取るらしい。

俺達は3人とも魔法の試験を選んだ。

「受験番号1756番ミュウ・ライトさんどうぞ。」

「はい！雷よ、我が身にその力を宿し、我が肉体の助けとなれ、＜肉体活性＞！」

ミュウは＜肉体活性＞を見せて、審査員の度肝を抜かしていた。もちろん特待生で合格。

「じゅ、受験番号1757番レイ・ハンさんどうぞ。」

「・・・水よ、風よ、敵を貫く水槍となれ、全てを沈静させる冷風となれ、2つは融合し全てを貫く氷槍となれ、＜ブリザードジャベリン＞！」

レイはほとんどの魔力をつぎ込んだ氷槍を作った。魔力を込めすぎ&呪文長すぎで床や天井を凍らせてしまったというアクシデントもあったが、一応特待生で合格。

さて俺の番だ。

「・・・受験番号1758番ギンヤ・ジンキさんどうぞ・・・」

何にしているかわからないので＜炎弾＞を変形させた、＜炎状網＞を見せた。ついでに氷を溶かしておいた。

・・・ぎりぎりで特待生で合格。もっと、派手なのやればよかったと後悔。

特待合格証を受け取り、ギルドに戻る。

「合格できたんですか！おめでとうございます！・・・え？3人も特待生なんですか！？すごいですね！」

受付嬢がめっちゃ驚いている。

「はい、俺はぎりぎりでしたけど・・・」

・・・真実なのに何故かミュウとレイに睨まれた。

「それで、素材についてなんです、うちのギルドマスターが少しお話があるそうで、一緒に来てもらえませんか？」

・・・なんとも胡散臭い。

2人の方を見ると、その眼は任せると言っていた。

「分かりました。」

俺達は奥の部屋に案内された。

そこには小柄な老人が座っていた。

「フォッフォッフォ、わしがギルドマスターじゃ。お主達が持ち込んだ素材について聞きたいことがあってのう。」

「何ですか？」

「＜蒼天虎＞はどうやって倒したのじゃ？」

「・・・何故自分の情報をばらさなくてはいけないのですか？教えるわけないでしょう？」

当たり前だ。自分の情報を漏らす馬鹿が何処にいる？

「＜蒼天虎＞の素材の中にボス級のものが混じっていたのじゃ。ボスはB級相当。一般の冒険者に倒せるはずが無いのじゃ。特に魔法学園入学前の小僧にはのう。」

「俺が自分で倒したのか疑っているのですか・・・確かにあいつは苦戦しましたけど？」

事実、氷魔法で足止めして、残りの魔力を全部魔法に変えて叩き込んで勝利したしな。

「お話はそれだけですか？ならば行きますけど？」

「その装備している牙は＜蒼天虎＞の大牙か？」

「そうですが何か？」

「わしに個人的に売ってくれんか？金貨10枚でどうだ？」

「いいですよ。ただ、ぼったくるつもりなら止めた方がいいですよ？」

「ちゃんと適正価格じゃ。」

「ではこれで。」

「うむ、つき合わせて悪かったのう。」

俺達は受付に戻る。

「＜蒼天虎＞の大牙は金貨10枚、他の素材は合計金貨90枚となります。」

「意外に多いな。」

「弱肉強食の森にはめったに人が入りませんから素材が不足しているのです。」

俺は金貨100枚を受け取った。この世界の貨幣は銅貨、銀貨、金貨の3種類があり、銅貨100枚で銀貨1枚、銀貨100枚で金貨1枚となる。基本的に銀貨1枚で宿に1泊出来るそうだから、銀貨1枚が1万円くらいということだろう。

「次は洋服屋を探すかーってどうしたの2人とも？」

ミュウは眼を丸くしていて、レイは完全に硬直していた。

金貨100枚＝1億円だから仕方がないだろう。

「「き、金貨100枚（ですか!?!）」」

「大声出すなあああ!」

少なくとも酒場にいた連中には聞かれてしまった。

「い、行くぞ!」

「「ご、ごめ—————」」

2人が話し終わる前に俺はいそいそとギルドを出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9756w/>

世界の創造主が魔法学園の生徒に！

2011年9月25日18時01分発行